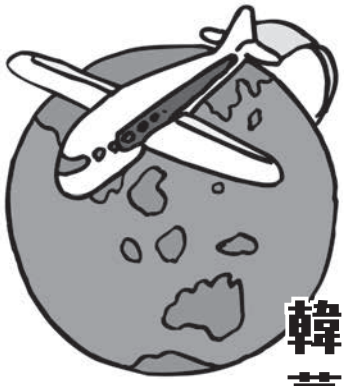

荏原製作所

海外便り

韓国ファソン駐在員の韓国で暮らしを重ねて思うこと　ーソウル編ー

私が韓国の京畿道・華城（ファソン）市に来てから、気づけば3年近い時間が経ちました。華城はソウルほど派手さはないのですが、工業団地が多く落ち着いた雰囲気のある街で、駐在生活の拠点としてはとても暮らしやすい場所です。以前はバスでソウルへ向かうことが多かったのですが、最近はGTX-Aという新しい急行鉄道が開通したことで、移動が格段に便利になりました。華城からソウルまでの距離がぐっと縮まり、週末に家族でふらっと出かけるハードルが下がった実感があります。

駐在生活により日常的に韓国での生活、ソウルなどの都市と関わるようになると、観光で訪れるときとは違った「日常の顔」が見えてきます。ここからは、駐在者としての視点で感じてきたソウルの魅力や印象を、私なりに紹介してみたいと思います。

■ソウルという都市の輪郭と、暮らしてこそ見えるスケール感

ソウルという都市は、とにかく“密度が高い”というのが最初の印象でした。市内にはおよそ950万人が暮らしていますが、これは単純に人口が多いというだけでなく、生活のすべてがぎゅっと凝縮されている感覚があります。会社へ向かう地下鉄の人の流れ、終わらない工事、入れ替わりの激しい店舗、どれもが「都市のエネルギー」を可視化しているように感じます。

華城のような地方都市で生活しながら、週末にソウルへ向かうと、そのコントラストはさらに際立ちます。ソウルは中心部に向かうにつれて一気に建物が高くなり、視界が“都市の谷間”に切り替わるような感覚になります。高層ビルの反射光や、車の流れが描く曲線、美しく整備された地下鉄入口など、どこを切り取っても大都市らしい密度があります。

興味深いのは、新しい建物が建ち並んでいる一方で、王宮や伝統家屋の韓屋、昔ながらの市場がそのまま残っている点です。例えばオフィス街のすぐ近くに古い城郭の石垣が続いていたり、近代的な商業施設の裏に静かな寺院がひっそり佇んでいたり、歴史と現代が自然に共存しています。この“多層構造”は、ソウルならではの魅力の一つだと感じています。

また、街の変化が非常に速いこともソウルの特徴です。これは数字で説明するより、実際に暮らしている感覚でしかないのですが。数週間前に見たカフェがすでに別の店に変わっていたり、工事が始まったと思ったら次に通るときにはもう新しいテナントが入っていたりと、街の表情がどんどん更新されていきます。理由ははっきりしませんが、都市としての競争の激しさや、市民の“新しいものへの反応速度”のようなものが影響しているのかもしれません。私のように週末に通う生活をしていると、その変化の速さが余計に目に飛び込んできます。

そして、街を大きく横断するハンガン（漢江）は、ソウルの象徴そのものです。私は頻繁に訪れるわけではありませんが、漢江を渡る瞬間はいつも「ソウルに来たな」という象徴的な雰囲気があります。橋のライトアップや、川面に映るマンション群の灯りは、都市の規模をあらためて感じさせます。地元の人にとっては当たり前の光景なのかもしれませんが、駐在者としてはこの“都市の静かな顔”に触れると、少しほっとする瞬間があります。

ハンガンに浮かぶ有名コーヒーチェーン

■アングク（安国）で感じる、静かなソウルの呼吸

ソウルの喧騒から少し距離を置いて歩きたいときに向かうのが、アングク（安国）です。観光地として知られる景福宮や北村韓屋村の近くにありますが、路地に入ると驚くほど静かで、韓屋の美しい屋根が並ぶ落ち着いたエリアが広がります。

チェーン店は少なく、韓屋を改装したカフェや小さなギャラリーが点在していて、散策するだけで心が整うような街です。華城での穏やかな生活とも、ソウル中心部の密集感とも違う、ゆったりとした時間が流れています。家族で訪れても静かに歩けるので、私にとって「もう一つのソウル」の顔としてとても気に入っています。

天気が良いと気持ちがいいです。
北村韓屋村（プッチョン・ハノンマウル）

■ソンスドン（聖水洞）に見る“更新され続けるソウル”

一方で、ソウルの“今”を感じたいときにはソンスドン（聖水洞）を訪れます。もともとは工場が集まるエリアでしたが、再開発で一気にトレンドの中心地になりました。古い工場建物を改装したカフェや、個性的なセレクトショップ、アートスペースなどが混在し、街全体が新しい空気をまとっています。

街を歩いていると、「古いものを壊して新しくしている」というよりは、「既存の枠組みをうまく活かしながら、新しい文化を重ねている」という感覚に近いです。工場の無骨な外観に洗練された内装が組み合わさっていたり、広い空間を使った展示が行われていたりと、ソウルの創造力を象徴する街だと感じています。

■韓国で経験した、忘れられない出産（少子化の国で感じた“手厚さ”）

私たちにとって韓国生活で特に大きな出来事が、韓国で経験した出産でした。実際に出産したのは私ではなく妻ですが、私も現地の病院にて立ち会うことができました。そして、韓国で有名な「チョリウォン」（調理院：産後ケア施設）での生活も体験することができました。チョリウォンは韓国で広く普及しており、病院での出産を終えた母親の休息のため、産後の母親と新生児を専門スタッフが24時間体制でケアするシステムが整っています。

出産後、私たちもチョリウォンに入り、家族三人で新しい生活をスタートさせました。病院とホテルの中間のような空間で、授乳指導や身体ケア、新生児のケアを受けられ、母親が安心して回復に集中できる環境が整っています。夫である私も同じ部屋で過ごすことができ、当時はチョリウォンから会社に通っていました。日本で同じ環境を探すのはなかなか難しいと思うので、これは韓国ならではの貴重な体験でした。

まるでホテルのようなチョリウォン。快適でした

こうした体験の中で感じたのが、韓国が深刻な少子化に直面しながらも、子育て関連の設備が非常に手厚いという点です。ソウルの百貨店やモールの授乳室はとても整っていて、個室スペースや調乳機、休憩用のソファ、ベビーベッドなどが備わり、どこも清潔です。外出中に安心して利用できる場所があるというのは、子育て中の家庭にとって大きな支えになります。

街を歩いていると、日本より子どもの数が少ないと感じる場面もありますが、その分、一人ひとりを大切にする意識が設備に表れているのではないかと感じました。少子化という課題の存在と、それを補うための手厚い支援。この

両面を肌で感じられたのは、生活者として非常に貴重な経験でした。

韓国生まれの我が子。元気に育っています

■GTX-A で変わった“距離感”と、週末の家族時間

華城市に暮らしていると、ソウルは「遠いようで近い街」でしたが、GTX-A の開通でその距離感がさらに変わりました。駅から駅へ一直線につながり、移動時間が大幅に短縮されたため、平日でも用事があれば気軽にソウルへ行けるようになりました。

以前は車での移動が前提で、時間帯によっては渋滞の心配もありましたが、いまは時間の見通しが立ちやすく、生活圏が少し広がった感覚があります。これにより、週末に家族でソウルを訪れる機会も自然と増えました。華城の落ち着いた日常とソウルの刺激的な空気を行き来する暮らしは、駐在生活の中でも特に気に入っている点です。

■我が家の“マジャンシジャン活用術”

週末のソウルには外食の楽しみも多いのですが、個人的に気に入っているのがマジャンシジャン（馬場市場）です。韓国最大級の食肉市場で、新鮮な肉が手頃な価格で手に入るスポットです。

韓国では日本ほど牛タンの人気が高くないのか、質の良いものが思わぬ値段で買えることがあります。私たちはここで肉をまとめ買いし、週末に友人を呼んで焼肉パーティーを開くのが定番になっています。市場の活気に触れながら、自宅で日本式の焼肉を楽しむという、韓国と日本が自然に混ざり合うような時間は、駐在生活ならではの楽しみだと感じています。

■駐在者として見つめるソウルの姿

こうして生活者として関わってみると、ソウルは多面性を持った魅力的な都市だと改めて感じます。華城に暮らすからこそ、ソウルの刺激や変化を冷静に眺めることができ、その両面が自分の生活を豊かにしてくれています。

韓国で出産という大きな節目を経験し、子育て環境や都市の仕組みを日々の生活の中で実感できたことは、駐在生活における大きな財産です。これからも、GTX で気軽に訪れる週末のソウルを家族とともに楽しみ、この街が見せる新しい表情を丁寧に感じ取っていければと思っています。

マジャンシジャン：やや迫力のある肉の展示

大好物：カンジャンケジャン（ワタリガニ）

アパート対抗の運動会に参加しました！

（荏原製作所　韓国華城（ファソン）市駐在員
渡邊（わたなべ） 郁磨（いくま））